

# 『カインの末裔』論

## —仁右衛門の「夢」をめぐって—

鄭旭盛\*

(e-mail : jungsung@nsu.ac.kr)

---

### 目次

---

- 一 はじめに
  - 二 仁右衛門の「夢」
  - 三 「夢」の実現
  - 四 仁右衛門の論理と笠井の論理
  - 五 おわり—「夢」の崩壊
- 

## 一 はじめに

『カインの末裔』は大正六年七月『新小説』に掲載された有島武郎の事実上の文壇デビュー作であった。翌年二月に一部の改稿を加えた上、『有島武郎著作集第三輯、カインの末裔』に収録された。その間の語彙の改稿は、特に注目するほどの作品の内容に左右される程の変異はない。

『カインの末裔』は、北海道の荒々しい大自然を背景に開拓小作農民達の姿を主人公である、広岡仁右衛門が松川農場から追い出されるまでの一年間を軸にして描いた小説である。この作品が発表されてから、大きな関心を受けただけに、作品に対する論議も頻繁に行われてきた。上杉省和氏は発表以来の長い研究史を、「『カインの末裔』研究ノート」<sup>1)</sup>の中で、①農民（小作農）を描いた客観的実写小説としてとらえた立場、②自然人（原始人、

---

\* 남서울대학교 일본어학과 교수 일본근대문학전공

1) 上杉省和『有島武郎一人とその小説の世界—』明治書院、1985年 4月（初出論文は、「『カインの末裔』研究ノート」（『常葉国文』、1982年 6月）pp119~162

野蛮人)の社会(文明)に敗北してゆく悲劇を描いた観念的小説としてとらえる立場、③主人公に仮託した作者の自己告白小説としてとらえた立場、以上の三つの基本的な観点でまとめた。『カインの末裔』に描かれた仁右衛門は、この三つの見解のように、自然人あるいは野蛮人で造形され、敗北していく小作民の姿を描きつつ、作者自らの場主としての問題を原点に据えた小説であるという見解が一般的である。

作者である有島武郎自身も自作評の中でこう述べた。特にここで引用したのは、よく注目されるところでもある。

茲に一人の自然から今掘り出されたばかりのやうな男がある。而も掘り出された以上は、それが一人の人間であつて、その母胎なる自然と噛み合はなければならない運命を荷ふと同時に、人間生活に縁遠い彼は、又人間社会とも噛み合はなければならない。彼は人間と融和して行く術に疎く、自然を征服して行く業に暗い。それでも拘らず彼は、そのデレンマのうち在つて生きねばならぬ激しい衝動に駆り立てられる。(『自己を描出したに他ならない「カインの末裔」』、大正八年一日『新潮』に)

この自評の中で作者自ら述べているように、『カインの末裔』は「人間と融和して行く術に疎く、自然を征服して行く業に暗い」主人公仁右衛門が結局のところ「人からは度外視され、自然からは継子扱ひにされる」人物として造形するという、まさに敗北してしまう一小作人を描いた作品であるということが自作評によって、まず窺い知ることが出来る。

つまり、この小説を通じて描いた「自然」(人間を創造する母体なる自然)と「社会」(人間と融合していく人間生活あるいは人間社会)と調和しきれない主人公仁右衛門の敗北の姿を描こうとした作品であると作者自ら自評の中で自己言及していたのである。それは、先ほど挙げた上杉氏の論点の中で、「自然人(原始人、野蛮人)の社会(文明)に敗北してゆく」ということに他ならないだろう。だとすると、この作品における主人公仁右衛門の敗北の原因は、まぎれもなく「人間と融和」することも出来ない、しかも「自然を征服」することも出来ないことにあると言えよう。しかも、このような仁右衛門を「原始人」もしくは「野蛮人」という意味としての「自然人」に規定し、それがために敗北にせまられるという見解を示している。

『カインの末裔』という作品は、果たして作者有島が描こうとした「人間と融和して行く術に疎く、自然を征服して行く業に暗」かったために、仁右衛門は敗北してしまったのだろうか。勿論このようなことが仁右衛門の敗北の一つの原因として考えられることではあるし、それについて否定するつもりは毛頭もない。しかし、敗北の原因をこれにだけ求められるのは、いささか懸念を感じるのである。他に敗北もしくは失敗の原因はなかつただろうか。筆者はここに、ある疑問を抱かないわけにはいかない。従って、本論は緒論<sup>2)</sup>で指摘されてきた仁右衛門の敗北の原因と思われる、その「野蛮」性、「原始」性、そして「自然人」

などなどに留まらず、更に新たな敗北の原因を探ってみようと思うのである。

## 二 仁右衛門の「夢」

北海道の厳しい草原からいきなりまるで弾き出されたかのように登場した主人公の広岡仁右衛門と一家（妻と赤ん坊、そして一匹の馬）は、新たな新天地を目指して、ここ松川農場に現れる。それからすぐその夜、松川農場の事務所で農場の帳場から出された契約書にただ判を押し、正式的に松川農場の小作農民になる。倒れかける小さいながら一軒の小屋と四町にあまる畑を借り受け、松川農場での小作民の一員になる。仁右衛門夫妻は次の日、朝ご飯を澄ますと、さっそく手慣れない土地ではあるが、まるで長い間、この地に身慣れているかのように、お互いに手配もなしに働き始める。本文では慣れた小作人としての仁右衛門夫婦の「本能」的な働きぶりをこう描かいている。

妻は、模様も分からなくなつた風呂敷を三角に折つて露西亞人のやうに頬かむりをして、赤坊を背中に背負ひこんで、せつせと小枝や根っこを拾つた。仁右衛門は一本の鋤で四町にあまる畑の一隅から堀り起しはじめた。他の小作人は野良仕事に片をつけて、今は雪囲をしたり薪を切つたりして小屋のまわりで働いてみたから、畑の中に立つてゐるのは仁右衛門夫婦だけだつた。少し高い所からは何処までも見渡される広い平坦な耕作地の上で二人は巣に帰り損ねた二匹の蟻のやうにきりきりと働いた。（二）

この件を読んでいると、仁右衛門夫婦二人しか残されていない畑の風景が何だか寂しさをより一層募らせるものではある。が、それが敢えて二人の必死な働きぶりを目立たせる感がある。しかもこのような彼らの労働は、止むことなく夜遅くまで続く。この時期だから夜は寒さも一入増すはずだろうが、そんなことには一向も気にする様子さえ見せない。それに仁右衛門は疲れ気味も見せず、せつせと働く。仁右衛門の働き振りをみていると、旺盛なる労働力を感じさせる。

2) 多くの論文がこれを指摘した。例えば、「社会的な生存も許されない苛酷な存在性を負荷された<自然人>」（山田俊治「『カインの末裔』の構造について」、『国文学研究』1978年 10月）、「彼の内部にひそむ野性的狂熱」（瀬沼茂樹「有島武郎集解説」、『日本近代文学大系 有島武郎』角川書店、1970年3月）、「本能に促されて大地を相手に生きる自然人」（佐々木靖章「有島武郎『カインの末裔』における改稿の意味」、『茨城大学教育学部紀要』1973年 3月）、「ふだんは無意識の領域におしかけている自然性を仁右衛門の存在と行動によって顕在化する」（森山重雄「『カインの末裔』」、『都大論究』1979年4月）、「自然人としての欲望の原初的な発露」（島達夫「『カインの末裔』論」、『日本文芸研究』1980年 6月）などなどこの他にもまだ多くの関連研究がある。

その旺盛なる労働力はまだまだ衰えることなく続く。仁右衛門は農閑期になっても休むこともなく、また出稼ぎに出ていくのである。きこりに出るとか、「鯨場稼」など、山海を問わず次から次へと、七尺に及ぶその大きな体を元にして旺盛な労働力で働き続けるのである。その旺盛な労働力で設けたお金で、「遅しい一頭の馬」、「プラオ」、「ハーロー」そして「必要な種」などを買い求め、今年の農作のために万全な準備を整えるのである。

ある日、仁右衛門は雪溶けの春さき、絶好に肥えてゆく自分の畑を眺めながら、次のような思いにふけるのである。

仁右衛門は眼路のかぎりに見える小作小屋の幾軒かを眺めやつて糞でも喰へと思つた。未来の夢がはつきりと頭に浮んだ。三年経つた後には彼れは農場一の大小作だつた。五年の後には小さいながら一個の独立した農民だつた。十年目には可なり広い農場を譲り受けてゐた。その時彼れは三十七だつた。帽子を被つて二重マンとを着た、護謨長靴ばきの彼れの姿が、自分ながら小恥しいやうに想像された。(三)

今満面に微笑みをたたえながら、上記の引用のような「夢」をみている、仁右衛門の姿が手に触れるように感じられる。上記のような小作人として仁右衛門の「夢」は、現実において実現可能である夢なのだろうか。これについて山田昭夫氏<sup>3)</sup>は、当時の小作制度の下ではいかに小作農民が自作農として独立するのがむずかしいことであるかを指摘した。山田昭夫氏の指摘のように当時の小作農民の関連制度を思えば、仁右衛門の「夢」は現実的に可能ではなさそうである。なのに、仁右衛門はどうしてこのような現実的に不可能な「夢」何かをみていたのだろうか。仁右衛門も自分なりの「夢」実現の理屈がなかったなら、「夢」みることなどしなかったはずである。従って、先ほどのような「夢」をみて、そしてそれが現実において実現出来ると思っていた仁右衛門には、それなりの「夢」の実現のための理屈があったはずであろう。すると、仁右衛門にはその「夢」の実現の為に企んでいた自分なりの腹案は何だったのだろうか。この問題について節を改めてさらに論を進めてみよう。

### 三 「夢」の実態

「農場一の大小作」や「独立した農民」そして何だかある場主のような姿を想像するなど、これらの「夢」が実現されるかどうかは別として、仁右衛門は一体どういう理屈を持っ

3) 山田昭夫『有島武郎』（『鑑賞日本現代文学』角川書店、1983年 7月）pp155~170

てこのような「夢」なんかをみていたのだろうか。

現に、仁右衛門は松川農場の帳場に金の工面を頼まなければならないほど、彼の懐には金がない。仁右衛門が所有している財産といえば、馬が唯一である。このような仁右衛門がどうして実現されそうもない不可能に近い「夢」をみていたのだろうか。何が仁右衛門の未来の「夢」の実現にそれ程の自信を持たせたのだろうか。それは恐らく仁右衛門にもそれなりの未来に対する明るい見通しがあったからに間違いない。それではこれからどのような見通しによって、仁右衛門は「夢」を膨らませていたのか、これからそのへんを探ってみよう。

何よりもまず考えられるのは、仁右衛門には他人とは比べられないほどの巨大な容貌とそれを源にする労働力がある。「六尺近い背丈を少し前にこごみして、栄養の悪い土気色の顔が真直に肩の上に乗つてゐた」と描かれているように、仁右衛門は巨大な外貌の持ち主であった。あんまりの巨漢たる外貌で町中の人々は、彼にだれ一人「楯つくもの」はいない。それに仁右衛門のことを人々は、「もう顔がありそうなのだと見上げても、まだ顔はその上の方にある」ということで、「まだか」という渾名が付くほど、とにかく大かな体格を持っている。

しかし、仁右衛門はただ体ばかり大きいわけではない。村中の農民達は一日の労働にさすが疲れ果ててしまうが、仁右衛門だけは日が暮れでも「星の光をたよりに野獣」のようにひたむきな働き振りを見せる程、彼はその巨漢を生かして発揮させる旺盛な労働力も他の小作人を遙かに上回るのである。

恐らく仁右衛門にはこのように、他の小作人と異なる巨大な肉体を生かし、他の小作人には真似出来ない旺盛な労働力を根拠に据えて、未来の「夢」を夢みていたはずであろう。だとすると、問題は他の小作人と違う旺盛な労働力、即ち物理的な優性論理という単純すぎる理由だけを用いて、自分の未来の「夢」を見ていたというのだろうか。もしそうであるならば、仁右衛門が思っている旺盛なる労働力と未来の「夢」と繋がるその仁右衛門なりの根拠はなんなのかということになる。一体仁右衛門はなぜそのように思っていたのか。この農場が始めてではなかったはずの仁右衛門の根拠は、恐らく松川農場の以前に働いていたはずの他のある農場での経験が仁右衛門の未来の「夢」に繋がっていたのではなかったのだろうか。

勿論、この作品では以前の農場でのことは描かれていない。しかし、仁右衛門が以前他の農場で働いていたことは、作品の中から十分に察せられる程、疑う余地のないことである。例えば、帳場から出された契約書に判を押す時の場面であるが、仁右衛門は「農場でも漁場でも鉱山でも飯を食うためにはそういう紙の端に盲判を押さなければならないという事は心得ていた」という内容を見ると、以前から働いていたことが十分に推測される。それから松川農場に来て初めて働き始める場面であるが、ここでもこう描かれている。「朝食をすますと夫婦は十年も前から住み馴れているように、平気な顔で畑に出かけて行った。二人は

仕事の手配もきめずに働いた。しかし、冬を眼の前にひかえて何を先きにすればいいかを二人ながら本能のように知っていた」と。これを見ただけでも仁右衛門がこの松川農場が始めての農場での経験ではないことは、十分に推測されるに余る。

従って、新天地の松川農場でいざ農作を始めようとするその時、夢見ていた仁右衛門の「夢」は、考えてみれば松川以前の農場での経験が仁右衛門の「夢」に影響を及ぼしていたとしか考えられないのである。そういうことで、先程の仁右衛門の「夢」の根拠は松川農場の以前の農場での経験と、何らかの関連があるだろうと思ったわけである。それでは、一体仁右衛門は松川以前の農場で、どんな経験をしたのだろうか。松川農場以前の仁右衛門を推定するためには、今の仁右衛門を丹念に分析する必要がある。

北海道の草原をわたって松川農場にやって来た仁右衛門一家は、その「市街地」からみえる「灯影」をみると、途端に「一種のおびえ」をおぼえたり、「身づくろい」をしたり、「仏頂面」になってしまう。ここでいう「灯影」はある意味で「社会の象徴」<sup>4)</sup>として描かれていたことは、すでに指摘されたことで、別に異論はない。しかし、ここで考えて置きたいことは、なぜ仁右衛門がその「灯影」を見た瞬間、「一種のおびえ」もしくは「身づくろい」をし、そして「仏頂面」にならなければならなかったのかということである。思うには、これこそ言うまでもなく、松川以前の農場での経験で、仁右衛門に内在化もしくは蓄積されていたものによって生じたことだろうと思われる。よく言う一種のトラウマとも言える現象でもあるだろう。いずれにせよ、仁右衛門はなぜこのような行動をとったのだろうか。「灯影」に対する仁右衛門の内在の顕現の行動に間違いのないと思われるが、一体これらの行動は何を意味しているのだろうか。吉田俊彦氏はこの「灯影」について「文明に怯える仁右衛門の野人的特徴」<sup>5)</sup>と指摘したが、それより少し狭義の意味として社会集団、仁右衛門に言わせるならば、一集団の農場の象徴的な意味であったわけであろう。つまり、仁右衛門はこれから新たに始まる新天地の松川農場を目の当たりにする瞬間、「おびえ」「身づくろい」「仏頂面」を顕現化したのであった。

ここで注目しておきたいことは、仁右衛門が「灯影」（一集団としての農場）と対面することで「おびえ」にただ留まるのではなく、「身づくろい」をしたり、「仏頂面」にするなど身構えを変えていく仁右衛門の行動様式である。仁右衛門のこのような行動様式は何を意味するのだろうか。もしかすると仁右衛門は、ある農場の一集団の中、即ち小作民としてのその集団の中でいつも弱者が背負わなければならない「おびえ」たる存在ではもうないことを意味するかもしれない。つまり、もう仁右衛門は「おびえ」に留まる存在ではなく、「身づくろい」や「仏頂面」という新たなレトリックを身につけた小作人の存在であったということだろうか。

特に「仏頂面」という身体的なレトリックは、まさにそうであるように思われる。「仏頂

4) 佐藤勝「『かんかん虫』から『カインの末裔』へ」（『有島武郎研究』、1972年 11月、右文書院）pp52~65

5) 吉田俊彦「『カインの末裔』考」（『岡山大学教養部紀要』、1990年 7月）pp79~92

面」の辞書的な意味は、無愛想な顔つきもしくは不機嫌にふくれた顔つきで、どちらかと言うと、仏頂尊の恐ろしい面相にたとえるほど、怖い顔つきのことを意味する。六尺の巨漢で「土気色の顔」の仁右衛門が「仏頂面」な顔つきをする様子は、想像するだけでも人に与える怖さの威力は、ただ者ではないはずである。仁右衛門は「おびえ」られる存在ではなく、もう「おびえ」返す存在であったのである。「敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面をしていやがつて、尻子玉でもひつこぬかれるな」と、妻に向かって言わんばかりの仁右衛門の警戒極まる姿勢からも十分に察せられるだろう。

一体、仁右衛門は松川以前の農場でどんなことがあったのだろうか。思うに、仁右衛門は小作人がそうであるように、松川以前の農場にいながら、その小作農民の集団という枠組みの中で過酷な小作民としての生活に強いられていたはずだ。非常に不利極まる当時の社会制度の中で、階級的に最下級民である小作人は、いろいろな労働に強いられ、階級的な抑圧によって「おびえ」られる存在であったに違いないはずである。しかし、そのような小作人の集団の中でも、松川農場での笠井みみたいに、小作民の中でも頭抜けた農民が恐らくその集団でも存在していただろう。仁右衛門はこのように以前に実在していたのかもしれない笠井のような小作人を目の当たりにした経験が恐らくあったと思われる。そしてそのような経験、即ち笠井みみたいな小作人の存在をみて、このような小作人の実在の新たな認識を通して仁右衛門自身なりの、ある可能性を見ていたのかも知らない。その時に仁右衛門が認識した、ある可能性というのはいうまでもなく先ほどの仁右衛門が夢見ていた未来の「夢」に他ならなかったのである。

しかし、仁右衛門は「夢」の実現どころか松川農場から退出を迫られる立場に追われてしまう。さらにこのような仁右衛門の「夢」の崩壊だけではなく、赤ん坊も病気でなくし、残されていた唯一の財産でもあった、馬さえもなくしてしまうのである。まさにこれ以上ない凄惨な状態に陥ってしまう。実現されることが不可能であるとは言え、どうして仁右衛門の「夢」はただの夢に終わってしまったのであろうか。

#### 四 仁右衛門の論理と笠井の論理

仁右衛門の松川農場での失敗は、着実に訪れてきた。当年の一年の悪天候と、それに並行する、賭博・酒・姦通・暴力など、放蕩極まる仁右衛門の松川農場での生活は、彼の夢の実現どころか生計も危ない状況に追い込んでしまったのである。仁右衛門にとっては、今年の失敗が「博奕だけだつた」と自分でつぶやいているように、彼には他の原因が了解できていない。

松川農場でのこの一年間を振りかえて見ると、何一つ失敗の原因にならないことはないほ

どの始末であった。小作料を払わない、燕麦などは横売りをする、亜麻を規定以上に耕作するなど松川農場での規定を一つも従おうとしない。それから、自分の畑を子供らが踏み歩いたということだけで佐藤と佐藤の子供を殴りつけたり、小石を投げて事務所のガラスを壊したり、小作農民一同で小作料の交渉のための集会にも一向に応じようとしない、町中の人々とはすぐにも喧嘩にかかるなど、その乱暴振りがもう手におえない程である。決して仁右衛門が言うような「博奕だけだつた」わけではないはずであった。我々はこのような乱暴極まる行動を見る限り、仁右衛門が抱いていた未来の「夢」は、あくまでも自分の独りよがり身勝手な思いによる、正に一場の春夢に過ぎないとしか思われぬのである。

しかし、仁右衛門には仁右衛門なりの理屈があって、その理屈から成り立った「夢」ではなかったか。それでは長年にわたる小作農民として培われてきた経験を基に、仁右衛門自分なりのその理屈、つまり「夢」の論理たるものは、一体何だったのだろうか。

『カインの末裔』という作品は、「自然という大枠のなかで総体的に闘争図式」という作意を読み解くことが出来るという論旨を以前指摘したことがある<sup>6)</sup>。正にこの作品は「闘争図式」の枠組みの中、いわゆる<弱肉強食>の自然界の法則が盛り込まれていた作品である。しかも、「小作農民の生活は、それ自体で内在された闘争図式」そのものであったわけである。仁右衛門という人物は言うまでもなく、この「闘争図式」のジクをなすこの作品の主人公である。

このような「闘争図式」の中心たる人物である仁右衛門の立場に立って、仁右衛門の「夢」を、つまり仁右衛門の論理を辿ってみるとこうなる。松川以前の農場でも小作人として働いていたはずの仁右衛門は、その集団の中でおそらく笠井のような成功した小作人がいたであろうということは、前節でも言及したことである。笠井みたいな成功した小作人に出会った瞬間、仁右衛門は言うまでもなく「闘争図式」の枠組みの内側に居ながら、<弱肉強食>の法則による成功のプロセスを考えていたはずであろう。つまり、少なくとも仁右衛門は農場という集団はもしかすると<弱肉強食>という法則に左右される集団であるとの認識に目覚められた人物として松川農場にやってきたと思われる。

強い力を源にして弱い側を制するということが<弱肉強食>の原理というならば、仁右衛門のような六尺にも及ぶ巨漢と他の小作人には真似出来ない旺盛な労働力を考えた場合、仁右衛門の「夢」は自分が考えても不可能なことではなかったはずである。仁右衛門に言わせると、やはり「博奕だけ」が松川農場での失敗の原因であった。いや、そうではなく「博奕」で負けたことが仁右衛門にはもっとも原因であったのかもしれない。

しかし、不幸ながら集団の「闘争」論理としての<弱肉強食>の法則における<強>は、仁右衛門が認識していたはずの<強>の次元ではなかったのである。笠井は松川農場の小作人の中で一番成功した小作人である。しかし、笠井は決して仁右衛門のような巨漢でもないし、恐らく

6) 拙稿 有島武郎『カインの末裔』論（『日本文芸論稿』、1994年 2月）pp26~37



仁右衛門のような強力な力もなさそうである。ある日の夜、集会所で仁右衛門と出会った場面を見ても、仁右衛門には適わないことは一目瞭然である。すると笠井の成功の源である仁右衛門の〈強〉（異なる次元であろうその〈強〉）とは、一体どういう〈強〉なのだろうか。

笠井という人物は佐藤や仁右衛門と違って「農場一の物知りで金持ち」の小作人であった。「珍しい長い顔」に「はげ上がった額」、「左の半面にかけて火傷のあと」があり、「下脛が赤く」、「くちびるが紙のやうに薄」い顔の形をした、どちらかと言うと何だか不気味な人相の持ち主である。しかし、その不気味な人相のわりに非常に親切に振舞うのである。仁右衛門と始めて会った時、泣き止まない仁右衛門の赤ん坊を見て「なんとまあ孩児の痛ましくさかぶぞい」といいながら、赤ん坊を心配してくれる様子や仁右衛門の小屋にまで道案内してくれる親切さ、それから仁右衛門の赤ん坊が危篤であった時も赤ん坊の手当てに携わるなどなど、そこにはある企みがあったかどうかは別として、笠井の親切振りが特に目立つのである。

それからお笠井という人物は、松川農場において天理教や神社の「世話役」を勤めるばかりでなく、農場の「総代」役も担っている。これを見る限り、笠井は松川農場内の小作人からも場主からもある程度の信頼を受けているかのように思われる。特に帳場とも親しいようであるらしい。それは仁右衛門が松川農場に始めて現れたその日の夜も、二人で何を話したかは分からないが、帳場とはお互いに話し合いをしているところをみても笠井という人物が松川という一つの集団の中で、どのように身熟しをとっているのかがよくわかれる。農場の集会の時も、小作と場主との両者の緩衝的な存在としての役割を果たすなど、どちらかという松川農場の集団の中で手腕の一番優れた小作民の一人であることは間違いないうである。これが恐らく松川農場での笠井であろう。

佐藤は松川農場の小作人の中でよくある普通の一般的な小作民であるというならば、笠井は小作人の中で最も成功した小作人であると言えよう。仁右衛門の「夢」の志向すべきところは、自分の腕力による力くらべではなく、笠井のような集団の人々から信頼を受け、それを持って生かす〈強〉でなければならぬ。つまり、仁右衛門が「夢」みた小作人としての成功の夢は、少なくとも笠井をロールモデルにしない限り、成功に導かれることは難しいはずである。しかし、依然として仁右衛門は、集団の中で笠井のようなく〈強〉の意味について理解していないままである。だが、仁右衛門はこのまま自分で固執する〈強〉でやり続けることが出来るのだろうか。農場から退出を迫る農場の人々と帳場の申し出に身動きもしない仁右衛門は、最後に場主との談判に挑むのである。

## 五 おわり—「夢」の崩壊

仁右衛門は今の状態を立て直す為に場主がいる函館に向かう。これは場主と「一喧

嘩」に挑み、農場での小作農民の苦情など色々な問題を自分から解決すると共に、農場での「居心地」もよくする為であった。しかし、何よりも今度の場主との談判のもっとも狙いは、笠井に出来なかったことを自分で実現しようという腹案も潜んでいた。このことが何を意味するかというと、仁右衛門が今まで固執してきた＜強＞ではなく、笠井の＜強＞への変容の意味もそこに孕んでいるともいえる。つまり、仁右衛門は今まで一度もやったこともない交渉という行動に出ようとしているのである。

しかし、仁右衛門は交渉どころか場主に自分の言い分を一言も申し出ることなく、「小作料の一文も納めないで、どの面下げて来臭つた。来年からは魂を入れかえろ。そして辞儀の一つもする事を覚えてから出直すなら出直して来い。馬鹿」と畳み掛けられた挙句、「すつかり打砕かれて」しまったまま家に戻る始末である。笠井の代役どころか自分の言い分を何一つ打ち出すこともなく、場主から畳みつけられたばかりである。ただ先ほどの場主の言葉にもあったように、退場だけは免れるようになったことだけが幸いであると言えらば幸いであろう。

出陣の時はまるで桃太郎が鬼退治にでも出かけるように、怖いものなしの悲壯極まる勢いではあったが、いざその場になると、何一つ言えなかったのである。なぜ仁右衛門はその場で一言も言えなかったのだろうか。まず、次の本文を見てみよう。

仁右衛門は場主の一眼でどやし付けられて這入る事も得せずにしりこみしていると、場主の眼がまた床の間からこつちに帰つて来そうになつた。仁右衛門は二度睨みつけられるのを恐れるあまりに、不器用な足どりで畳の上になちやつにちやつと音をさせながら場主の鼻先きまでのそのそ歩いて行つて、出来るだけ小さく窮屈そうに座りこんだ。(七)

これは場主との対面の場面である。ここのところを見ていると、一番気になるのは、仁右衛門のぎごちない態度である。場主の強い目線一つでしりこみの状態になってしまうとか、それから「不器用な足どり」や「窮屈そう」にすわりこむなど、これらの姿勢などは今まで仁右衛門には見たこともない、全く別人のような姿である。そのような姿から以前の＜強＞たる仁右衛門の面影は全然見当たらないのである。

一体どうして急に仁右衛門はこのような惨めな姿勢になってしまったのか。思うに、これらの仁右衛門の姿勢は、他ではなく「おびえ」がなせる態度であるように思われる。即ちこれらのすべての姿勢は、場主と対面する瞬間、仁右衛門が覚えた、ある「恐れ」もしくはその「おびえ」が顕現化された諸行動であったわけである。

しかし、この「おびえ」が場主との対面の場面を通して始めて顕現化されたのではない。すでに函館に着いてからその前兆は、現れていたのである。これについて作品の中ではこう述べられている。「動ともするとおびえて胸の中ですくみそうになる心を励まし励まし彼は巨人のように威丈高にのそりのそりと道を歩いた」と。もうこのへんで仁右衛門はすっかり「お

びえ」にさいなまれてしまっていたわけである。そして、その「恐れ」のせいで場主の前ではさらに「おびえ」が増すばかりで、結局自分の言いたいこと一つも言えず、帰ってしまったのである。

だが、仁右衛門は場主から「来年からは魂を入れかえろ」と言い渡されたように、退場させられることはとどめた。以前仁右衛門が言ったように、「博奕だけ」が今年の失敗の原因であるというならば、来年新たに「夢」の実現に向けばいいわけである。しかし、仁右衛門はやり直すことなく、夜遅く逃げるように松川農場から出てしまうのである。なぜ仁右衛門は場主から農場に居てもいいという許可も得たのに、自分から農場を去ってしまったのだろうか。それは場主との面会の後、すっかり「おびえ」を覚えてしまったことと、自分の未来の「夢」の理屈でもあった、かつての〈強〉の意味そのもの自体が失われてしまったからである。そしてもう二度と前のような「夢」なんか見ることもない小作人になっていたのであろう。

さらに仁右衛門はこう呟く。「何んという暮しの違いだ。何んという人間の違いだ。親方が人間なら俺れは人間じゃない。俺れが人間なら親方は人間じゃない」と嘆いている仁右衛門は、今まで感じたこともない新たなとてもない衝撃を受けたことが読み取れる。これはかつての自分の〈強〉の崩壊は言うまでもなく、笠井の論理によるその〈強〉にでも立ち向かうことの出来ない高く聳えた強固たる壁のようなものであった。

有島武郎が自作評で言及した「人間と融和して行く術に疎く、自然を征服して行く業に暗い」仁右衛門が「人間と融和」し、「自然を征服」するとしても乗り越えることが出来ないまさに強固たる壁のようなものである。つまり、これは仁右衛門や笠井などの小作農民の一集団を超える紛れもない集団の外側に存在することを意味していたのである。

強固たる壁、これは恐らく〈階級〉を意味していたのであろう。ここに来て仁右衛門の前に立ちほだかっている最強の〈強〉は、仁右衛門の〈強〉はいうまでもなく笠井の〈強〉をも遥かに凌ぐ〈階級〉の壁であった。それは仁右衛門が今まで小作人の農場集団の内側に存在しながら用いていた〈強〉の論理ではなく、その集団の外側に存在していた、仁右衛門には、今まで経験外で一度も認識されたこともない新たに目の当たりにした〈強〉であったわけである。

仁右衛門の「夢」の失敗あるいは仁右衛門の敗北は、純「自然人」でもなく（「夢」を抱くように欲にまみれた小作人）、それとって「人間と融和」することも出来ない（笠井のような〈強〉の持ち主でもない）、まさに宙吊りの状態がまず一次的な失敗の原因になったはずである。換言すれば、笠井や佐藤のようなどちらかの小作人になれなかった仁右衛門は、敗北の道しかなかったはずであった。しかし、これらの敗北の論理を覆ってしまう〈階級〉の論理がそこにはあったのである。仁右衛門はここに来て目の当たりにしてしまった〈階級〉の論理による〈強〉の認識に出会った瞬間、そこにはかつての「闘争図式」の瓦解が生じ、これ以上先には進められることのできない、まるで真空状態に陥ってし

まったはずであろう。

以上のことをみると、仁右衛門の「夢」への崩壊と最後の敗北は、有島武郎自ら言った「人間と融和して行く術に疎く、自然を征服して行く業に暗い」ところではなく、それより遙か向うにその原因があったのかも知れない。

### 【参考文献】

- 本多秋五(1954)『「白樺」派の文学』講談社 pp213-217  
長谷川泉(1958)『近代名作鑑賞』至文堂 pp102-146  
山田昭夫(1966)『有島武郎』明治書院 pp155-170  
西垣勤(1971)『有島武郎論』有精堂 pp168-186  
江種満子(1984)『有島武郎論』桜楓社 pp57-98  
上杉省和(1985)『有島武郎一人とその小説の世界』明治書院 pp119-162  
植栗弥(1990)『有島武郎研究－「或る女」まで－』有精堂 pp42-67

## 要 旨

本論は仁右衛門の敗北の原因を探るのが論旨であった。既成の研究では、自然人あるいは野蛮人で造形され、敗北していく小作民の姿を描きつつ、作者自らの場主としての問題を原点に据えた小説であるという見解が一般的であった。しかし、本論はこれらの論点の他に仁右衛門の敗北の原因に注目し、さらなる原因を探ってみたのである。そこにあったのは松川農場以前の仁右衛門の経験で内在化されていた<強>の論理が仁右衛門の「夢」の実現のために何の役にも立たない論理であることにまず一次的な敗北の原因があったことを本論を通して確認した。

それからお仁右衛門の敗北の原因は仁右衛門の<強>の論理に留まらず、<階級>の問題もあったのである。最後の場主との対面の場面は、まさに仁右衛門が今まで認識することすらなかった問題で、仁右衛門にいまなる「夢」を夢見ることを許さない強力極まる問題であった。結局仁右衛門は敗北の道しか残されていなかったのである。これらが仁右衛門の敗北の新たな原因であるということを本論を通して明らかにしたわけである。

キーワード：小作農民、夢、敗北、階級、<強>の論理、弱者

투 고 : 2012. 11. 30  
1차 심사 : 2012. 12. 15  
2차 심사 : 2013. 1. 5